幻視する解釈者
――ミシェル・ド・セルトーにおける「記憶」の概念について

The Visionary Interpreter: A Reflection on Michel de Certeau's Concept of "Memory"

福井 有人
FUKUI, Arito

はじめに

本稿の目的は、ミシェル・ド・セルトー（Michel de Certeau, 1925-86）の著作における「記憶（mémoire）」の概念の内実とその理論的意義とを明らかにすることにある。

セルトーは、キリスト教霊性史を専門とする歴史家にしてイエズス会修道士であった。現代文化におけるキリスト教の存在理由を問う神学論や、パリ・フロイト学派への継続的なコミットメント、街を歩きTVを観るといった日常行為の分析など、その活動は多岐にわたる。晩年の大著『神秘のものがたり』第1巻（1982年）は、その思索と実践の総決算というべき作品として理解されている＊1。実際、そこでは、群衆（foule）、場所（lieu）、身体（corps）、発話行為（énonciation）、語りかた（manière de parler）といった、セルトーが複数の領域を渡り歩くなかで長年にわたり検討しつづけたさまざまな主題が合流しており、学知としての神秘主義（la mystique）の成立と零落をめぐる物語が子細に語られている。だが、生前に準備が進められていた第2巻を公刊するよりも前にセルトーが世を去ったことで、『神秘のものがたり』は未完のプロジェクトとして潰えてしまう＊2。そのため、上述した諸点を含めて、セルトー自身が十分なしかたで展開することのできなかった問題がいくつも残されている。本稿が中心的に取り上げる「記憶」もまたその一つであり、複数の著作に散見される主題ではあるものの、「記憶」がセルトーの歴史叙述においてもつ重要性や思想的な射程について、先行研究は十分に明らかにしてきたわけではない＊3。

本稿がとりわけ「記憶」の概念に注目するのは、その内実を明らかにする作業がセルトーの歴史探究の独自性を解明することに寄与すると考えられるからである。セルトー自身は歴史家として自己規定をしているが＊4、その一方で、テクストにおいては明らかにたんなる歴史叙述とは異なる独自の思考が展開されている箇所が多く存在する。つまり、縦横無尽にレファレンスを駆使しキリスト教神秘主義の来歴を提示してみせながら、同時に、歴史を思考するとは、テクストを読むとはどういうことかを語ってもいるのである。

＊1　以下の論文は、『神秘のものがたり』の計画が最初に予告されてから第1巻の出版に結実するまでの著作の生成プロセスを丹念に追跡している。Andrés G. Freijomil, « Pratiques du réemploi et historicité des titres dans *La Fable mystique, XVIe-XVIIe siècle I* », Luce Giard (dir.), *Michel de Certeau. Le voyage de l'œuvre*, Paris, Facultés Jésuites de Paris, 2017.

＊2　『或る時代のためのカイエ〔*Cahiers pour un temps*〕』誌のセルトー特集号（1987年）に収録されている論考にリュス・ジアールが付した註によれば、第2巻は1988年に出版予定とある（« Mystique et psychanalyse », in Luce Giard (dir.), *Michel de Certeau*, Paris, Centre Georges Pompidou, « Cahiers pour un temps », 1987, p. 189）。その後、ジアールの手により、セルトー自身の構想メモに基づいて『神秘のものがたり』第2巻が2013年に出版されている。Michel de Certeau, *La Fable mystique II, XVIe-XVIIe siècle*, Édition établie et présentée par Luce Giard, Paris, Éditions Gallimard, 2013. 以下、*FMII*と略記する。

＊3　François Dosse, « Michel de Certeau et l'écriture de l'histoire », *Vingtième Siècle. Revue d'histoire*, n° 78, 2003/2, p. 145-156は幅広くコーパスを設定し、セルトーにおける歴史と記憶の関係を考察している。また、以下の論文は『日常的なものの発

本稿が注目する「記憶」の概念は、こうしたいわばメタ歴史的な記述において登場している。例えば、『神秘のものがたり』第1巻の第6章において、セルトーはジャン＝ジョゼフ・スュラン『来世の事柄に関する経験の学知（*Science expérimentale des choses de l'autre vie*）』の序文に精緻で多面的な読解を施しているが、そこではいささか唐突に、「記憶とは、むしろそれぞれの現在において認められ明かされるべき、或る形式の永遠性なのだろう〔la mémoire sera plutôt la permanence d'une forme, à reconnaître ou à manifester dans chaque actualité〕」*5と述べられる。自己言及的な性格が色濃く窺える『神秘のものがたり』においてこのように述べるとき、はたしてセルトーは、いかなるパースペクティブに到達していたのであろうか。もっとも、スュランの元のテクストに「記憶」の語は現れていないだけでなく、第6章のなかで「記憶」に関する明確な言及は他に見当たらないため、セルトーの言明の意味をこれ以上深く追求することは困難であるように思える。第6章の内在的読解に留まるならば、上の一節の意味は謎めいたままであろう。それゆえ本稿は、「記憶」に関してまとまった記述を残している他の著作を参照し、概念やイメージのネットワークを取り出したうえで、最終的に上の一節に立ち戻り、そこに込められている「記憶」の意義を明確化してみたい。言い換えれば、本稿が試みるのは、「記憶」をめぐる記述について包括的な検討を行ったうえで、読者を面食らわせるメタ歴史的な言明をセルトーの歴史実践そのものに照らして考察することである*6。こうした作業を通して、『神秘のものがたり』をはじめとした歴史叙述と「記憶」概念とが取り結ぶ独自の理論的な連関、ならびに「記憶」の実践的な意義が明らかとなるとき、本稿の目的は達成される。

以上を踏まえて、本稿は次のような順序で議論を進めてゆく。第I節では『歴史のエクリチュール』（1975年）*7などを手掛かりとし、セルトーが近代の歴史叙述にどのような課題を見出していたのかを簡潔に確認することをもって、「記憶」概念を読み解くための予備作業とする。第II節においては、「記憶」概念が集中的に論じられている唯一の箇所である『日常的なものの発明』（1980年）第6章を取り上げ、セルトーの「記憶」論の内容を三つの観点から考察する。続いて第III節では、『神秘のものがたり』第7章を俎上に載せ、前節で取り出された三つの観点をより具体的なレベルで検討する。最後に、第III節までの議論に基づいて、先述した「或る形式の永遠性」としての「記憶」とは何の謂いかを明らかにし、セルトーの歴史叙述のプロジェクトが有する一般的な射程を提示する。

明』第6章の「記憶」論を援用しながら、同じ著作の第12章で参照されているフランソワ・フュレとセルトーの議論との比較検討を行っている。Daniel Poitras, « Pratiques historiennes croisées de la mémoire et expériences de l'histoire dans *L'Invention du quotidien* (1980) de Michel de Certeau et *Le Passé d'une illusion* (1995) de François Furet », *Conserveries mémorielles* [en ligne], n° 9, 2011 (URL : http://journals.openedition.org/cm/822　最終アクセス：2022年4月19日). *The Certeau reader*, edited by Graham Ward, Oxford, Blackwell Publishers, 2000はセルトーの「歩行」論における「記憶」の意義について紙幅を割いているが、概ねその記述は要約にとどまっており、「記憶」概念の独自性に関して踏み込んだ記述は見当たらない（p. 112-115）。

*4 Michel de Certeau, *La prise de parole et autres écrits politiques*, Paris, Seuil, « Points Essais », 1994, p. 39.

*5 Michel de Certeau, *La Fable mystique I, XVIe-XVIIe siècle* [1982], Paris, Gallimard, « Tel », 2003, p. 252. 以下、*FMI*と略記する。

*6　例えば、セルトーに関する数少ないモノグラフの一つであるJeremy Ahearne, *Michel de Certeau. Interpretation and its other*, Cambridge, Polity Press, 1995は、本稿とは異なる視座においてであるが、『ルダンの悪魔憑き』と『神秘のものがたり』第7章とを比較対照した議論を行っている。

*7 Michel de Certeau, *L'Écriture de l'histoire* [1975], Paris, Gallimard, « Folio Histoire », 2002. 以下、*EH*と略記する。引用に当たっては邦訳（『歴史のエクリチュール』佐藤和生訳、法政大

I. 歴史叙述の二つの課題

セルトーが近代の歴史叙述に見出している諸問題はきわめて多岐に及ぶため、安易な要約をゆるさない＊8。本節では、そのなかでもより根本的な水準に位置するといえる二つの問題、すなわち（1）場所、（2）史料／モデルに関する諸問題を取り上げることにしたい。

『歴史のエクリチュール』第二版の序文においてセルトーは、「歴史叙述（historiographie）」という語自体が「ほとんど撞着語法（オクシモロン）」であると述べている（*EH*, 11）。書くという行為は可能性の条件を現在に置いており一人称的であるのに対して、歴史的出来事の時間は過去に属し、その意味は本質的に複数の解釈に開かれているからである。書く者がロビンソン・クルーソーや新大陸の開拓者になぞらえて語られていることからわかるように＊9、対象化し、分析し記述するためには、書く主体の拠点となる「場所（lieu, place）」が必要である。「場所」という語には、文字通り、個人の部屋や研究室という具体的なレベルで理解できる余地が残されているように思われるが、叙述者の現在という抽象的な意味で用いられることがもっぱらである。セルトーによれば、いかなる歴史叙述も、時代、国家、階級、経済的ないし社会的水準における同質性を想定している。そうした同質性を判定できるのは、分析者、叙述者の現在の「生産の場所」が確保されているからであり、それこそが歴史叙述の認識論的基盤にほかならない＊10。セルトーの主張は『歴史のエクリチュール』の末尾における次のような批判的な言明において明らかである。

> この点において、歴史の言説はその本質からして政治的なのであって、場所の理法〔*raison du lieu*〕を前提としている。歴史の言説は、系譜や外部性といった関係のなかに他者を「包括する＝理解する」ことによって、ひとつの場所を、すなわち自らの生産の場所を正当化する。（*EH*, 414.）

叙述者の現在を中心にして分析や解釈が展開せざるをえない（「場所の理法」）という至極当然の事実をわざわざ指摘するのはどうしてであろうか。現在の安定した場所から歴史が語られるという前提そのものが忘れられるならば、叙述者の一人称はニュートラルなものとして表象されるか、あるいは消去されることになるからである（序文や後書きなどを除き、近代の歴史叙述において一人称が介入することはきわめて稀である）。畢竟、それは、歴史叙述がメタポジションの言説となることを意味する＊11。それとは反対に、セルトーが構想しているのは、「すべてを統一するメタ言語という虚構を拒否すること」（*EH*, 11）、言い直すなら、叙述者自身のポジショ

学出版局、1996年）を適宜参照したが、訳語は断りなく変えている。

＊8　その一部を挙げるだけでも、以下のごとく多様な論点が混在することが見て取れる。（a）部分冠詞としての「歴史を書くこと〔faire de l'histoire〕」（*EH*, 22, 74）、（b）不在者・死者との関係（*EH*, 73-74, 140-141）、（c）「言われざるもの〔non-dit〕」（*EH*, 79-82）、（d）史料の生産と「空間の再編成」（*EH*, 100-106）、（e）声とエクリチュール（*EH*, 253-257）、（f）時間と歴史性〔historicité〕（*FMI*, 22）。

＊9　cf. Michel de Certeau, *L'invention du quotidien, 1. Arts de faire* [1980], éd. Luce Giard, Paris, Gallimard, « Folio Essais », 1990, p. 198-205. 以下、*IQ*と略記する。引用に当たっては、邦訳（『日常的実践のポイエティーク』山田登世子訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2021年）を適宜参照したが、訳語は断りなく変えている；渡辺優「文庫版解説　日常的実践という大海の浜辺を歩く者――ミシェル・ド・セルトーと「場」の思考」、『日常的実践のポイエティーク』、516-547頁。

＊10　セルトーの歴史叙述論における「場所」の重要性については以下の論文を参照のこと。福井有人「ミシェル・ド・セルトーにおける「場所」の問題――歴史記述と神秘主義をめぐって」、『フランス哲学・思想研究』、第25号、2020年。

＊11　知の主体とその対象との間の認識論的な区別――これ自体が一つの権力関係である――の上に過去を客観的に表象しようとする科学的立場を、セルトーは「啓蒙〔Aufkärung〕」（*FMI*, 23）と呼ぶ。この点に関しては次の論考が決定的に重要である。Michel de Certeau, « L'histoire, science et fiction », *Histoire et psychanalyse entre science et fiction*, présentation de Luce Giard,

ンがテクストのなかに書き込まれているような、「主体の科学〔science du sujet〕」(*EH*, 142) としての歴史叙述である＊12。

それでは、史料の問題に関してセルトーはどのような記述を残しているだろうか。ここでは、自己言及的な性格がはっきりと窺える晩年の論考、「神秘的歴史性」(1985年)＊13を手掛かりとしたい。論考の冒頭では、歴史研究(ここでセルトーは叙述だけでなくアーカイブ調査も含めた広い意味での研究について語っている)が「二重の引力」の影響下にあることが述べられている。第一に、歴史研究には、「“神秘的な”史料〔documents « mystiques »〕」——念頭に置かれているのは神秘家のテクストである——を広い時代的文脈のなかに位置づけ、いかなる状況から当の史料が生じたのかを解明するという主要な目的がある。言い換えれば、「科学的な企図は〔探究のための〕単位や規則を自らに与えるのであるが、それらに基づいて打ち建てられるさまざまな相関関係を首尾一貫した一覧表のうちに配分すること」(*FMII*, 19) が目指される。だが同時に、歴史研究は別の引力にもとらえられている。「研究者は、自身が分析のために用いる装置そのものを史料が変質させてしまうこと、研究者自身が史料に対して要求する事柄を、史料が提示する問いが変位させてしまうことも願っている」(*FMII*, 19)。もちろん、ここでの「研究者」という形象には、セルトー自身の姿が重ねられていると言わねばならないだろう。これと類似した言明が、『神秘のものがたり』の序論においてもなされている。

> 収集され互いに関係づけられた史料が、その抵抗力によって、私たちの解釈の試みが基づいている仮説や〔解釈の〕コード全体を変質させる力を獲得するのでなければならない。(*FMI*, 19.)

ここでは、史料を既存の方法論に従わせて分析したり、従来のモデルからの偏差を引き出すのとは異なるしかたで、読解が困難なテクストに理解可能性を与えることが求められている。出来合いの解読格子を適用して読むのではなく、解釈者自身のほうがテクストの運動に巻き込まれてみせなければならない。そうした要請は最終的に、一つひとつの史料の特異性を尊重しながら、読解の方法をそのつど新たに発明する、という解釈行為に行き着くだろう。場所と史料とをめぐる諸問題をまとめるならば、セルトーが非常に高度な要求をしていることが理解される。すなわち、第一に、特異な史料を前にしてたじろぎつつも、それを読解可能にする方法を解釈者自らが生み出すこと。さらに、その叙述のうちに一人称を巻き込ませ、他者についての言説が同時に自己についての言説ともなるような形式を

Paris, Gallimard, « Folio essais », 1987, p. 66-96. 以下、*HP*と略記する。

＊12　論文「歴史叙述操作」の末尾でリファーされているように(*EH*, 142)、ここでセルトーが念頭に置いているのはジャック・ラカンの「科学と真理」(『精神分析の対象』のセミネールの開講講義)である。Jacques Lacan, « La science et la vérité » [1965], in : *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 855-877.

＊13 Michel de Certeau, « Historicités mystiques » [1985], in : *FMII*.

実践すること。本稿は、こうした課題に対するセルトー自身の応答を、「記憶」論をプリズムとすることで明視できることを以下で示したい。

II. 変容、断片、脆さ――「記憶」の在処

本節では、「記憶」が集中的に論じられている唯一の論考である、『日常的なものの発明』第6章「物語の時間〔le temps des histoires〕」*14を手掛かりに、「記憶」論の骨子を取り出す。まずは第6章のコンテクストを確認しよう。『日常的なものの発明』の主題の一つは、家具を配置したり商品を消費するという、一見すると受動的に思われるありふれた行為に創造性を見出すことにある*15。第6章が位置づけられる第2部「もののやりかたの理論〔Théories de l'art de faire〕」では、一望監視的技術が全面化した社会において監視の眼を騙しながら溌剌となされる、言説化されない実践――セルトーはそれを「操作〔opération〕」や「手続き〔procédure〕」と呼ぶ――の所在が探求される。セルトーはマルセル・デチエンヌとジャン＝ピエール・ヴェルナンによる『知性の狡智』(1974年)を取り上げ*16、古代ギリシアの民話・物語における「メティス」を日常的実践の指標として捉える。デチエンヌが「メティス」(métis＝「機略・策術」)を見出しているのは、航海士や医師、産婆など、刻一刻と変転する事態に咄嗟の機転を利かせて対応する人物たちにおいてである*17。セルトーは、「メティス」を叙述するデチエンヌもまたテクストのなかで「メティス」を実践しているとした上で*18、その直後の節(「記憶の技と機会〔L'art de la mémoire et l'occasion〕」)で実践知のタイプの一つとして「記憶」を論じるに至る。もっとも、その「記憶」論はデチエンヌのテクストの読解から内容的に独立している以上、セルトー独自の思弁によって展開されているものとして読むべきであろう。

私たちは以下で「記憶」論の骨子を取り出すことを試みるが、はじめに、第6章でセルトーが与えている「記憶」のイメージを手掛かりとしたい。以下の引用には、その独特なイメージの論理が凝縮され提示されている。

> 他の鳥の巣のなかにしか卵を産まない鳥のように、記憶は、自分のものではない場所で生産を行う。内容(欠けている細部)は自分のものであるとしても、記憶が自らの形式を受け取り、移住を行うのは外的な機会によってである。記憶の発動は、変容と切り離すことができない。さらにいえば、記憶はおのれの介入力を、変容をうける力――定まった場所を持たずに、位置を変え、流動的でありうる力――それ自体から得ている。これ

*14　*IQ*, 118-135.

*15　福井憲彦は、日常行為をめぐるセルトーの観点、すなわち消費や使用を積極的な生産行為としてみなす視角に注視しながら、「フランスの歴史家たちのなかで、いちはやく、プラティークの世界における歴史の展開に注意をうながした」としてセルトーを評価している。福井憲彦「テクストとプラティークの間――あるいは史料・現実・想像力」、『歴史を問う 4　歴史はいかに書かれるか』岩波書店、2004年、73頁。

*16　Marcel Detienne, Jean-Pierre Vernant, *Les ruses de l'intelligence. La métis des Grecs* [1974], Paris, Flammarion, « Champs essais », 2018.

*17　具体的には、病人の体質や大気の状態・習慣などさまざまな変数を考慮した上で柔軟な処置を下さねばならない医師(ヒッポクラテス『流行病について』のなかで報告されている)、「もっとも短い時間にもっとも広い見通しをもったもっとも正当な意見をつくり上げることができる」政治家(弁論家)などが挙げられる。

*18　フーコーとブルデューによる分析を参照しながら、セルトーは、一方に合理的な知を担う分析者を置き、他方には経験知を身につけてはいるがそれをうまく言葉にできない受動的な実践者を配する、といった図式的な発想から離れた思考法を模索している。理論と実践の関係の脱構築とも言うべきこのプロジェクトは、セルトーにおいて、歴史叙述、神秘主義、日常性分析、精神分析などを貫く重要な問題系をなしている。cf. *EH*, 245-283 ; *IQ*, 75-117, 232-235.

が記憶にあって変わることがない特徴である。すなわち、記憶は、他者（一つの機会）から生まれながら、そして他者を失いながら（もはやそれは一つの想い出にすぎない）、みずからを（みずからの「資本」を）形成するのだ。（*IQ*, 131. 強調は原文による。）

糸口となるのは、カッコウのように定住する場所をもたず、他者の場所に卵を産みつける鳥のイメージである。これは、無人島を開拓し一個の要塞として構築するロビンソン・クルーソーの営為とはまったく異質である。セルトーはここで、「記憶」が自らに固有のものを生み出すという側面（「内容は自分のものである」）を指摘しつつも、その発動条件は主体のイニシアティブの外にあるという点を強調している。別様に言い直せば、「記憶が自らの形式を受け取り、移住を行うのは外的な状況によってである」と述べられるように、「記憶」は自由に引き出すことが可能なストックとしてではなく、ふとしたきっかけによって呼び起こされるものとして考えられている。セルトーのいう「記憶」とは、不意なる出会いをきっかけにして何かを想起するという、行為の出来事性にフォーカスする語なのである。以上を踏まえて、私たちはセルトーの記述に沿いながら、「記憶」の特徴を一つずつ簡潔に確認していこう。

第一に、「記憶」は「多様な変容〔altération〕の働きによって動かされる」（*IQ*, 132）。これは先の引用から直接引き出すことができる論点である。「変容〔altération〕」――ラテン語« alter »（「他の・他方の」を意味する代名詞的形容詞）に由来する――という語それ自体が、「記憶」のイメージが「他者から生まれる」ということの意味を示唆している。つまり、ここで問われているのは、想起を誘発する不意なる機会のことにほかならない。そうした機会の内実に関してセルトーは詳細な説明を残していないが、「変容」という語が登場する別の文脈が大きな手掛かりとなる。自分一人しかいないはずの島の浜辺に何者かの足跡を発見したロビンソン・クルーソー*19や、アビラのテレサをはじめとした神秘家の文献に言及する際にこの語が用いられていることを考慮するならば*20、「変容」の範型となるのは、知によって包摂することのできない異質な他者――それは「野蛮人」でもあれば神でもある――との遭遇によって、主体の認識の安定性が突き崩される突発的な経験であると言ってよい。先の引用文が告げているとおり、「記憶」はこの「変容」の経験なしに発動されない。「鍵盤に触れる指に合わせてピアノが音を「出す〔rend〕」のと同じように、記憶は〔自らを囲んでいる〕状況によって奏でられる」（*IQ*, 132）。この意味において、「記憶」とは、外的な状況や未知なる他者との邂逅によって触発されるイメージなのだ。

もっとも、正確を期すならば――以下の点は必ずしも『日常的な

*19 Daniel Defoe, *Vie et aventures de Robinson Crusoé*, édition établie et annotée par Francis Ledoux, Paris, Gallimard, 1959, p. 153〔ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』武田将明訳、河出書房新社、2011年、221頁〕.

*20 cf. *IQ*, 228 ; *FMI*, 273. 『歴史の不在者』の結論部「変容〔Altérations〕」においてセルトーは、ロビンソン・クルーソーを歴史家の形象としながら、「野蛮人」の足跡に慄く経験を考察している。Michel de Certeau, *L'absent de l'histoire*, Ligugé, Mame, 1973, p. 177-180.

ものの発明』のなかでは強調されてはいないが――、それは特別な状況において生じる何か超常的な現象なのではなく、あくまで日常のなかで出会われる異質性であるといわねばならない*21。無論、等し並みに扱うことはできないが、ロビンソン・クルーソーが「野蛮人」の足跡と遭遇したのは、普段のごとく停泊所へむかう道中の浜辺においてであり、テレサが「天上の狂気」を生きたのは日々の務めたる祈祷のさなかにおいてである。つまり、「変容」という語によってセルトーがとらえているのは主体を触発する外的なきっかけである、と言うだけでは十分でない。「変容」は、日常的生を理解するパースペクティブそれ自体が根本的に変形される経験であり*22、いわば日常的なものと溶け合った他者との出会いなのだ*23。

「変容」の経験を発端として「記憶」が動きだすとすれば、そこで何らかのイメージを思い出すという行為の様態は、どのように理解されるのだろうか。セルトーは、思い出すという行為を、触発する対象への応答としてとらえようとしている*24。「記憶」の第二の特徴が介入してくるのは、まさにこの点においてである。セルトーによれば、「こうした応答は〔一つひとつが〕独自のもの〔singulière〕」であり、「それぞれが別々の破片〔éclats〕や断片〔fragments〕からできている」(*IQ*, 133)。興味深いのは、セルトーがこうした「断片」としての「記憶」を「メトニミー」として捉えているという点だ。「一つひとつは、影から浮かび上がり切り取られるとき、そこに欠けている全体に結びついている。それはこの全体に対するメトニミーとして輝く」(*IQ*, 133)。言い換えれば、「変容」によって呼び起こされたイメージ=「記憶」は、それを含むより広い配置や背景を喚起させる*25。「具体的なディテール」がヴァーチャルな全体を幻視させるのである。

「記憶」の三つ目の特徴としてセルトーが挙げているのは「流動性〔mobilité〕」である。この特徴は、「他の鳥の巣のなかにしか卵を産まない鳥」の比喩を語るパラグラフにおいて既に窺える(「定まった場所を持たずに、位置を変え、流動的でありうる力」)。セルトーがここで念頭に置いているのは、第一には、はっきりと思い描くことができない、あるいは幾度も反芻するにつれて摩耗し姿を変えてしまうような、イメージそれ自体の不安定である。だが、さらにいえば、「記憶」は「消え去るときにしか〔対象を〕とらえない〔elle ne retient [son objet]que disparu〕」(*IQ*, 131)と述べられるように、想起されるのはたんに脆く不安定なイメージというものではない。むしろ、何かが消え去ってしまうその瞬間のイメージである。このような非持続性あるいは流動性ゆえに、「記憶」は明確な対象として記述しがたい、曖昧な身分を与えられる。

*21　セルトーが『ユニヴェルサリス百科事典』に寄せた「神秘」の項では、「出来事」による変容の例としてジュリアン・グリーンの日記が引用されている。「〔1932年〕12月18日――先刻、トロカデロの列柱の下で、ぼくは立ち止ってシャン=ドゥ=マルスの眺望を見守っていた。庭園の上には光を受けた霞が漂って、春のような天気だった。物音は早春の晴れた日にだけもつあの軽やかな質をもっていた。二、三秒のあいだに、ぼくはぼくの少年時代の一部分、十六歳と十七歳との年月をすっかりふたたび生きた。それはぼくを快いよりも苦しい、不思議な気持にした。けれども、ぼく自身とその風景とのあいだにきわめて深い調和が存在していたので、ぼくはかつてのように自問した、そのすべてのうちにちょうど海のなかに消える一滴の水のように自分を消すことは、肉体をもうもたないことは甘美ではないか、と。とはいえただこう考えることができるだけの意識は残して――「ぼくは宇宙の一片だ。宇宙はぼくのうちにあって幸福だ。ぼくは空だ。太陽だ、木木だ、セーヌ川だ、川を縁どる家々だ……」この奇異な想念がぼくから完全に離れ去ることはなかった。結局それはおそらく死の向側でわれわれを待っているあの種の何かだ。そして突然ぼくは自分を非常に幸福に感じたので、その大きな幻覚の思い出を稀な、かつ貴いものとして保ちつづけねばならないと思いながら家に帰った。」Michel de Certeau, « Mystique » [1971], *Le lieu de l'autre. Histoire religieuse et mystique*, éd. Luce Giard, Paris, Seuil/Gallimard, 2005, p. 331〔『ジュリアン・グリーン全集7　日記』小佐井伸二訳、人文書院、1980年、133頁〕.

*22　論考「霊的経験」において、セルトーは自らの来し方を振り返りながら、実存的な切断をもたらす出来事から発して「共同の生〔vie commune〕」へといたる霊性家の道程を提示している。« L'

続いて、私たちは、以上に確認した「記憶」の三つの特徴をより具体的なレベルで考察するために、『日常的なものの発明』における「記憶」論を別の文脈に接ぎ木して検討を行う。というのも、次節で取り上げる文脈は、それ自体は「記憶」を主題とするものではないが、そこには私たちが確認した「記憶」の特徴が明確に見て取れるからである。

III. 去りゆく天使――神秘家の書簡をめぐるセルトーのレクチュール

III－1.

第III節では、セルトーが述べていた「記憶」の三つの特質、すなわち、「変容」を契機とすること、メトニミーとして全体を喚起させること、脆く不安定であることを具体的な文脈に即して考察してゆく。私たちが取り上げるのは、『神秘のものがたり』第1巻第7章「照明を受けた＝学識ある無学者〔L'illettré éclairé〕」である。まずは第7章の基本的な枠組みを確認しておこう。この章で中心的に取り上げられているのは、ジャン＝ジョゼフ・スュラン（1600-1665）がラ・フレーシュのコレージュの友人へ送付したと推定される、1630年5月8日付の手紙である。セルトーは1966年にスュランの『書簡集』の校訂版を上梓しており＊26、二年後には一連の校訂作業の成果の一つとして論文が発表されているが＊27、これが加筆修正を経て『神秘のものがたり』の第7章として収録されることになる＊28。イエズス会士としての第三修練期を迎えたスュランは、或る日、乗合馬車で「一八か一九歳の青年」と出会う。この青年は「きわめて単純で粗野な言葉遣いをし、文字は一切読めなかった」が、「あらゆる内的な恩寵と賜物とに満たされて」いた。この並外れた青年との出会いがスュランの書簡の主題である＊29。

やや先取りして図式的に述べるなら、『神秘のものがたり』の第7章では、史料における神秘家（スュラン）のポジションと、それを読み解く歴史叙述者（セルトー）のポジションという両者の関係そのものが問われている。セルトーは、スュランと自らとの間に何らかのアナロジーを見出すようなしかたでテクストの読解をおこなう。より正確に言えば、スュランとセルトー自身との間、スュランと彼を読む者との間に或る種の符合を読み取ることがセルトーの「解釈」そのものなのだ。そこで私たちは、「記憶」論の三つの論点をそれぞれ辿り直すなかで、神秘家の視点（テクスト内在的視点）と歴史叙述者の視点（読解の視点）とを交互に見てゆき、セルトーの実践の要諦を明確化したい。

expérience spirituelle » [1970], *L'étranger ou l'union dans la différence*, éd. Luce Giard, Paris, Desclée de Brouwer, « Points Essais », 2005, p. 1-12.

＊23　以下の研究は、『書簡集』を取り上げながら、「超常のものと通常のものの区別がほとんどつかない」とまでいわれるスュランの平安の境地について詳細な分析を施している。渡辺優『ジャン＝ジョゼフ・スュラン　一七世紀フランス神秘主義の光芒』慶應義塾大学出版会、2016年、191-234頁。関連するテーマとして、『神秘のものがたり』第1巻第6章のスュラン論においてセルトーは、スュランが待ち望む読者たち・「公衆〔public〕」を「神の現実的な形象」であると述べている（*FMI*, 255）。「公衆」ないし「群衆〔foule〕」の主題については、別稿にて検討をおこないたい。

＊24　「記憶とは、記録するもの〔enregistrante〕というよりも応答するもの〔répondante〕である」（*IQ*, 132）。

＊25　部分と全体の関係に基づく比喩は、厳密に言えばメトニミー（換喩）ではなくシネクドーク（提喩）であるが、セルトーは両者の修辞学上の差異に注意してはいないため、本稿も両者の区別を立てることはしない。

＊26　Jean-Joseph Surin, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Michel de Certeau, préface de Julien Green, Paris, Desclée de Brouwer, 1966.

＊27　« L'illettré éclairé dans l'histoire de la lettre de Surin sur le Jeune Homme du Coche (1630) » in : *Revue d'ascétique et de mystique*, t. 44, n° 176, 1968, p. 369-412.

＊28　例えば、以下の論文は、『神秘のものがたり』第7章の

まず、「変容」に関しては何がいえるだろうか。スュランの側の「変容」とは、ありふれた場所である乗合馬車においてなされた青年との出会いにほかならず、スュランにとってそれは既存の見方を突き崩すほどの衝撃であった。書簡の冒頭で述べられているように、青年はスュランにとって「十分讃えきれないほどの善」であったのである。「彼はいわば、私のあずかり知らなかった類の稀有な魂であり、彼について、私は驚くべき秘密を知りました」*30。スュランは青年の敬虔と透徹した知性に衝撃を受けたにちがいない。だがそれだけではなく、セルトーが明らかにしているところによれば、スュランは第三修練期にあたって、上長であるルイ・ラルマンとの良好ならざる関係や身体の不調に加えて、自身のメンタリティの深いところを規定している荒みに苦しんでいた。それは、或る特定の人々は知らず知らずのうちに地獄堕ちを運命づけられているのではないかという疑念、自分は決して恩寵を与えられてはいないという自覚である*31。青年が発した言葉は、こうしたスュランの荒みに幾ばくかの光を照らし、俗世という「砂漠」(*FMI*, 308)へと出立する力をもたらしたのだと考えられる*32。

それでは、セルトーの視点から見た「変容」とは何に当たるのか。それは、既存の方法論の適用を容易には受けつけない「“神秘的”な史料」(*FMII*, 19)との遭遇のことであろう。「神秘的」というのは、「無学者」とのひと時かぎりの対話のなかで、打ちひしがれた霊的エリートが若者の言葉に圧倒されるという舞台設定が現実離れしているように見えるからであり、さらには、書簡中の若者の姿にはどこかスュラン自身が重ねられており、両者を明確に区別することができない曖昧さをとどめているから(*FMI*, 280)である。このテクストを前にして、セルトーはきわめて複雑かつ大胆な探究の手続きを取っている。セルトーが注目するのは、スュランの書簡が各地で――スュランそのひとの名さえ脱落しつつ――「修正と改訂にかけられ」(*FMI*, 321)、大まかには同様の形式だが細かいレベルでは別の文言に替えられ、複数の独立した作品として流通してゆく「テクストの散種」の様子である(*FMI*, 287-308)。「1649年以前に、モンスでは第四版まで印刷されており、パリで四版(1648年、1649年、1650年、1661年)、リヨンで三版(1658年、1665年、1668年)、メヘレンで一版(1648年)、ルーアンで一版(1649年)、リエージュで一版(1657年)、ブリュッセルで一版(1661年)、アントワープで一版(1690年以前)、ケルンで一版(1690年)が印刷されている。(私たちがまだ把握していない)他の版もおそらく存在するだろう。これらの版に続いて、『霊的書簡』がナント(1695年)とパリ(1698年)で何度も再版され、古典的な著作となった」(*FMI*, 287)。セルトーが取っている徹底して実証的な手続きは、ボルドー、カルパントラ、ナントを始めとした

元となった1968年の論文を踏まえながら、スュランの書簡がセルトーの神秘主義理解の根幹を提示する「理論的フィクション〔fiction théorique〕」であることを説得的に示している。フロイトの『夢解釈』第7章からセルトーが借用している「理論的フィクション」とは、理論にして実践――自らが行っていることについて語っている――を端的に言い表す言葉である。cf. Patrick Goujon et Sophie Houdard, « Jean-Joseph Surin et « L'illettré éclairé ». Une série littéraire (1968-1982) », *Les Dossiers du Grihl* [en ligne], n° 2, 2018 (URL : https://journals.openedition.org/dossiersgrihl/6801 最終アクセス日:2022年4月19日).

*29　以下の文献は、ルダンの悪魔憑き事件をめぐる伝記的事実から主要著作の解釈に至るまで、スュランについて網羅的な分析を行っている。渡辺優『ジャン=ジョゼフ・スュラン　一七世紀フランス神秘主義の光芒』。

*30　Jean-Joseph Surin, *Correspondance, op. cit.*, p. 140 ; *FMI*, 281.

*31　cf. *FMI*, 319.

*32　cf.「彼は私に語りました。[……] もっとも大きな不幸とは、身体の苦しみや弱さに耐えられないことです。けれども、まさしくそれらのうちにこそ神は大いなる意図を有しておられます。神は、大きな悦びよりもはるかに、苦痛によってこそ魂と一つになるのです。[……] 真の祈りとは、神から何かをいただくことにあるのではなく、むしろ神へ与えることにあり、授けられたのちに、愛によって神へと与え返すことにあるのです。魂の静寂と燃え立つ愛とが法悦にいたるとき、忠実なる魂は、神が魂を満たすべく近付かれるのに応じて、すべてをおのれから取り去らねばならない、と」(Jean-Joseph Surin, *Correspondance, op. cit.*, p.

都市で流通した作品群が織りなす「南方の伝統」と、パリからモンス、リエージュ、さらにはアントウェルペンのフラマン語版にいたるまでの「北方の伝統」の両者の経路を丹念に辿りながら、微妙な文言の変化を指摘してゆくというものであり、その徹底性には瞠目すべき執拗さがある。もっとも、以上の手続きは第７章のおよそ三分の一を占めるにすぎない。以降の箇所でセルトーは、実証的な探究方法だけではアプローチできない部分に着手することになる。

III－2.

第二の論点となるメトニミーは、スュラン／セルトーが何を「記憶」として想起したのかに直接かかわっているという点できわめて重要である。これはテクスト内在的に取り出せる論点ではなく、セルトーという読解者の視点があって初めて成立する。というのも、スュランの書簡においては、或るイメージを全体の部分として見るとか、何かを想起したという文言は確認できないからだ。それだけでなく、セルトーの記述自体にも、「記憶」やそれに類した言葉は見られない。しかしそれでも、「記憶」という論点から『神秘のものがたり』の第７章を理解できると言えるのは、セルトーがスュランの視点に自らを重ね合わせるなかで、スュランが幻視したかもしれぬイメージを取り出そうとしているからであり＊[33]、そのかぎりで、前節で検討した「記憶」論の特徴と符合するからである。

セルトーが書簡から引き出し、展開しようと試みているのは、天使のイメージである。実際、スュランは書簡中で、「私は彼が天使であるかと思ったほどで、この印象はポントワーズで告解し聖体拝領するよう彼から求められるまでずっと続きました。というのも、秘蹟は天使のためになされるのではありませんから」と証言している＊[34]。スュランは若者が天使であるという印象を、束の間抱いたのである。セルトーはスュランの記述を踏まえて、スュランが馴染んでいたと思われる天使の伝統に言及する。レファレンスとして挙げられているのは「トビト記」であり、旅に送り出されるトビアは、「天使ラファエルが彼の面前に立っているのを見たが、それが主の天使だとは思わなかった」(5.4) とある。この点で、トビアはラファエルが天使であることに最初は気づかず、スュランは若者を天使であると疑ったという差異を脇に置くならば、「トビト記」にリファーすることは、スュランの幻視した天使をより広いコンテクストに結びつけることに等しい。セルトーは、未知なる他者による「変容」をともに経験したという点で自らとスュランとを重ね合わせた上で、あたかも、セルトー自身が連想した天使の聖書的伝統（メトニミーが喚起する「全体」）と同じ伝統や同じイメージをスュランもまた想起したかのような叙述をしているように見える＊[35]。トビアとラファ

141 ; *FMI*, 283)。

＊33 「幻視（vision）」という語を必ずしもセルトーが多用しているわけではない。本稿においては私たちは、この語を〈有るものを通して今ここには無いものを見る〉行為を意味するものとして理解する。cf. Michel de Certeau, « La Folie de la vision », *Esprit*, n° 66, Juin 1982, p. 89-99.

＊34 Jean-Joseph Surin, *Correspondance, op. cit.*, p. 141-142 ; *FMI*, 283. スュランがおそらくは念頭に置いている天使と秘蹟の関係をめぐるスコラ神学の議論については、トマス・アクィナス『神学大全』第３部第80問題第２項「この秘跡を霊的に拝受することは人間にのみか、あるいは天使たちにも属することであるか」（トマス・アクィナス『神学大全 第44巻』稲垣良典訳、創文社、2005年、34-36頁）を参照のこと。

＊35 cf. *FMI*, 314-315.

エルの関係がスュランと若者の関係に重ねられ、さらに後者が「神秘的」な史料（の書き手であるスュラン）と歴史叙述者（セルトー）の関係に重ねられる。したがって、セルトーは次のように言うことができる。

> 私たちの解釈は、以前の〔諸解釈〕と同じく、幾人もの間での「対話」の相互的な側面を混ぜ合わせている――それは同時に、私たちがスュランを読むことであり、スュランが出来事を読むことであり、この過去との「関係」を通して私たちが現在を了解することである。他なるものへの関係は、これら三つの範囲で同時に作用する。私たちがそれを取り扱うとき、この「貧者」とは、スュランその人であり、彼の出会った若者でもあり、やり取りが言葉を与えている私たち自身の一部でもある。（*FMI*, 321.）

「以前の〔諸解釈〕」というのは、スュランの書簡を模りパリやリヨンで何度も印刷された作品群のことであり、セルトーはそれら一つひとつが、乗合馬車の物語に加えられた独自の「解釈」であるという観点に立っている。各地で再版を重ねた「霊的書簡」の作成者たちが織りなす、この物語の解釈学的系列にセルトーもまた参与する。もちろん、ここでは、« interpréter »という語が「解釈する」のほかに「音を奏でる」という意味を有していることが念頭に置かれている。それゆえ、「三つの範囲で同時に作用する」という箇所は、「三つの音域で一斉に奏でられる」という意味でもある*36。何故「一斉に〔simultanément〕」といわれるのだろうか。それは、セルトーが自分自身の「現在」について何らかの「了解」を得るのは、過去と「関係〔relation〕」を結ぶことによってだからであり、「他なるもの」――日常的な地平において出会われる神秘――を解釈するスュランのテクストを解釈することによってだからである。言い換えれば、セルトーの認識において、解釈するとは本質的に複数的かつ協働的な営為なのであり、そうした行為のなかで、個別の換喩的なイメージ（ここでは天使のそれ）は過去から現在までを貫く一つの全体（霊性家が親しんでいる天使論の聖書的伝統）へと開かれてゆく。セルトーにおいて「解釈」とは、解釈者の現在時と史料が位置づけられる過去との間に状況的な共鳴関係を見て取ることにほかならない。

「記憶」論に窺われた第三の要素である「流動性〔mobilité〕」は、セルトーがスュランの叙述のうちに見ている「天使」のイメージの独特さを物語っている。初めて会ったはずの青年を「天使」として、「過去ではない何ものか〔quelque chose qui n'est pas un passé〕」（*FMI*, 408）として想起したという理解はスュランのテクストには

*36 「[……] 音楽的な意味で「解釈する=奏でる」こと、それは、〔神秘主義のエクリチュールを〕私たちから離れている過去としてみなすことであり、私たちがそれらの文献と同じ場所にいるのだと想定しないことである。同時にそれは、〔そのエクリチュールの〕運動を、今度は私たちが引き受け、実践しようと試みること〔essayer d'en pratiquer à notre tour le mouvement〕、或る仕事の痕跡を、遠くからではあっても辿り直すことであり、過ぎ去ってゆく際に、書かれた言葉を謎めいた文字へと変えていったあの何がしかを、知の対象に同定しないことである」（*FMI*, 29）。

現れていないため、もちろん、この「天使」の「流動性」、すなわち現象の一時的・非持続的性格についてもスュランの叙述は割かれていない。それはあくまでセルトーの解釈によって浮かび上がるイメージである。このように、形式だけに着目しても、「流動性」をめぐる読解の手つきは強引と言うほかなく、必ずしも全体の議論が首尾よく接続されているわけではない*37。しかしながら、その強引さゆえに、セルトー自身の視点が際立って見えてくるように思われる。他の場所でセルトーが用いている表現を借りるならば、「天使」は、「現れることがすなわち消え去ること〔apparaître, c'est disparaître〕」*38という、本質的に「弱い」存在として読み込まれている。乗合馬車の若者は天使であるかもしれないと疑う——だがその期待はスュラン自身によってすぐさまかき消される——スュランの記述を念頭に置きながら、セルトーは次のように述べる。

> 通常の法や尺度からすれば異質で、本質からして比類のないものであるこの顕現は、「表さ」れたり「書か」れたりする一切のものを超えている。それは言語の外にあり、自然の事柄の外にある。それは消え去るためにしか現れない——「無のうちに消える前の一瞬の歌」とヴァルター・ベンヤミンが解釈した、あのクレーの「新しい天使（アンゲルス・ノヴス）」のように。（*FMI*, 315.）

ここでは、乗合馬車の青年が、クレーの作品とカバラの伝統とに依拠するベンヤミンの天使になぞらえられることで、束の間のうちに現れては退いてゆくという不安定性が強調されている*39。「比類のないもの〔incomparable〕」、「言語の外にあり、自然の事柄の外にある〔il se situe hors du langage et hors de la nature〕」といわれるのは、「言葉遣いにおいてきわめて単純かつ粗野〔simple et grossier extrêmement en sa parole〕」であり、祈りにおいて「崇高〔sublime〕」であると青年を形容するスュランの記述を受けてのことである。いずれにせよ、引用文全体のトーンとしては、青年＝天使との邂逅をある種の「神秘体験」として理解しようとする向きがあることは認められよう。とはいえ、ここで重要なのは天使に比せられる超自然性ではなく、「消え去るためにしか現れない〔il n'apparaît que pour disparaître〕」という「顕現」の様態のほうである。これは、第II節で私たちが取り出した、何かが消え去ってしまうその瞬間のイメージという「記憶」の第三の特徴と厳密に合致する*40。

以上にみたように、スュランが必ずしも明示的に述べてはいない要素までをもテクストから引き出し、ベンヤミンの天使へリファーするといったアナクロニスティックな手段をとるにいたるセルトーの読解は、結局のところ、いったいどのような事柄を明らかにして

*37　この「基礎」の上に、セルトーは多層的な解釈を打ち立てる。『神秘のものがたり』第7章の後半でセルトーは、スコラ的学知と俗人信徒の経験的学知という対立軸や、物語における「貧者」の役割という観点を提示しながら、『マイスター・ブーフ』、モリエール、ギュイヨン夫人らからなる系譜のうちにスュランの書簡を位置づけようとしている。cf. *FMI*, 321-329.

*38　Michel de Certeau, « Le parler angélique », *FMII*, 285. 1984年の論文「天使のことば」は、体系的な記述を含むものとしては、セルトーにおいて唯一の天使論である。「創世記」、「士師記」からトマス・アクィナス、ボナヴェントゥラ、アビラのテレサ、シレジウス、ヤーコブ・ベーメ、さらにはアポリネール、ルネ・シャールまで、論文内のコーパスは多岐に及ぶ。そこでのセルトーの関心は天使の知性や存在論的特性にではなく、あくまで「天使のことばのうち、いくつかの一般的な特徴や形象を指摘する」（*FMII*, 260）ことにあり、天使のパロールの突発性、神と人間とを媒介する中間者的役割に議論の重心が置かれている。ベンヤミンとリルケの天使から過ぎ去り（passage）のモチーフが取り出されている点は、『神秘のものがたり』との照応関係を示唆しているだろう。

*39　ベンヤミンによる以下の記述を参照のこと。「カバラが物語るところによれば、神は毎瞬無数の新しい天使を創造しており、これらの天使たちのおのおのは、もっぱら、神の玉座のまえで一瞬神の讃歌をうたっては無のなかへ溶け去っていく定めにあるのだという」（ヴァルター・ベンヤミン「アゲシラウス・サンタンデル」『ベンヤミン・コレクション3　記憶への旅』久保哲司訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1997年、12-13頁）。

*40　現前と不在が同時であるようなこの「記憶」のヴィジョンの着想元の一つには、「ルカによる福

いるといえるだろうか。端的にいうなら、『神秘のものがたり』第7章におけるそうした読解は、スュランの言葉が発せられている場所を触知することに行き着く。「出来事」を経験することから、それを書くことへと移行するスュランのプロセスこそ、ここで焦点となる事柄である。ベンヤミンが言及される上述のパッセージの直後では、その自伝的エッセイ「アゲシラウス・サンタンデル」からの一節が引用され＊41、消え去る青年＝天使の形象は「不在の力〔force d'absence〕」ならびに「事物の消滅の場所〔lieu d'évanouissement des choses〕」(*FMI*, 315) と言い換えられる＊42。つまりセルトーは、天使の消失が、その外観に反して或るポジティヴな「力」をもっていることに目をむけるのである。青年＝天使が退いてその姿を日常の風景のなかに溶け込ませるとき、それまで彼が居た場所は、「空なる場所〔vide〕」(*FMI*, 315) としてスュランの前に残される。セルトーによれば、ほかならぬその場所こそ、スュランのエクリチュールが始まる地点なのだ。以下の数行は、セルトーが叙述しようとしている消失の「力」の内実を具に物語っている。

> それは出来事である――彼の世界に何かが生じたのだ。それはたんなるいくつかの言葉であり、無について語り、あの宝、貧しさの「あとで」ものを語る、何でもない言葉にすぎない。だが、まさにこのようにして、これらの言葉は一篇の詩のように、語ることができなかったもの、言葉をもたぬもの〔in-fans〕にことばを与える。(*FMI*, 319. 強調は原文による。)

ここでセルトーは、天使の顕現＝「出来事」のうちに含まれている非持続性や儚さを、視覚的なイメージよりもむしろ言葉の次元に引き寄せて結論を導こうとしている。青年＝天使の退隠という「出来事」は、親密な対話の終幕を意味するのではなく、むしろ、スュランにとって新しいシークエンスが始まること、すなわち、この「出来事」について証言する行為が開始されることを告げている。なぜなら、逆説的にもスュランは、他者が与えてくれた言葉のうちで初めて、みずからを語ることができるからだ(「彼は他所から到来するこのことばのなかで語っている〔Il parle dans cette parole venue d'ailleurs〕」FMI, 320)。一方で、類稀なる霊感をもつ者にのみ去来する「詩」として見るならば、「何でもない言葉〔des riens〕」とは、たしかに青年＝天使から投じられたそれにちがいない。だが他方で、「あの宝、貧しさの「あとで」ものを語る〔disent « après » ce trésor, la pauvreté〕」という記述に目を向けるならば、言葉の審級はスュラン自身に求めることもできる。要するに、ここでセルトーがほのめかしているのは、スュランが書簡に報告する他者の言葉にはスュラ

音書」で報告されている「エマオの旅人」のエピソードがあると推測できる。二人の旅人は復活したイエスと――イエスその人とは知らずに――食事を共にするが、イエスがパンを裂いて二人に渡したとたん、「二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」(24.31)。

＊41 「〔天使は、〕私がもはや所有してはいない物たちのなかに凄まっている。彼はそれらの物たちを透明にし、すると私には、そのひとつひとつの背後に、それを贈ろうとしたひとの姿が見えてくる」(*FMI*, 315〔「アゲシラウス・サンタンデル」『ベンヤミン・コレクション3 記憶への旅』、14頁〕)。なお、セルトーは同じパッセージを « Le parler angélique », *FMII*, 285においても引用している。

＊42 引用、翻訳、天使など、セルトーにおける重要概念はベンヤミンにおけるそれと重なるところが少なくない以上、両者の比較検討がなされる余地があると思われる。cf. 竹峰義和『〈救済〉のメーディウム ベンヤミン、アドルノ、クルーゲ』東京大学出版会、2016年、65-142頁; Hent de Vries, "The 'Mystical Postulate' in Benjamin, de Certeau and Derrida ", *MLN*, 107/3, 1992, pp. 441-477.

ン自身の言葉が反響している以上、両者を明確に区別することがもはや問題にならない地点が存在するということだ（FMI, 320）。ベンヤミンを参照しつつ天使のイメージから引き出された「不在の力」とは、このように、「言葉をもたぬものにことばを与える」、スュランにとっての新たな「始まり〔commencement〕」となるものの謂いであるだろう＊43。

第III節の議論をまとめよう。私たちは、『日常的なものの発明』の第6章における「記憶」論を、スュランの書簡の読解というまったく異なるコンテクストに引き合わせることで、セルトー独自の「記憶」概念の内実を明確化することを試みた。（1）まず、「変容」という観点からは、神秘家と歴史叙述者の経験の同型性が示された（両者とも、知に包摂されざる出来事に触発を受ける）。（2）次に、メトニミーの観点からは、出来事が喚起する特異な断片的イメージ（＝天使）は、聖書的伝統や天使特有のイメジャリーという「全体」へと想像的に結びつけられるが、これは（1）の観点に基づいてセルトーがスュランのポジションに身を置く「解釈」によって可能になっていた。（3）だが、この断片的なイメージは、それをまなざす者の前で微かに明滅するにすぎない、不安定なものである。セルトーはそのイメージの消失を、いや、正確にいうならば、消失そのもののイメージを追跡し、スュランが書簡を書くにいたるまでの霊的なプロセスを再構成するのである。以上を踏まえるならば、次のようにいうことができるだろう。セルトーの歴史叙述の核心にあるのは、「部分」としての断片的なイメージと、それをメトニミーとして浮かび上がる「全体」との間の関係それ自体を発明する実践であり、「記憶」とはその実践の方法の名なのだ。これが、第I節において私たちが確認したところの、「“神秘的な”史料」の読解方法を自ら発明する実践であり、「主体の科学」としての歴史叙述にほかならない。

おわりに

最後に、「記憶」の概念をプリズムとして浮かび上がるセルトーの実践の意義を、より一般的な角度から敷衍することで、本稿の結論を導きたい。

はじめに私たちは、『神秘のものがたり』第6章における「記憶とは［……］或る形式の永遠性なのだろう」という「謎めいた」一節に言及した。紙幅の都合上、第6章で取り上げられるスュランの『経験の学知』序文までを含めた詳細な検討をここで施すことはできないため、確認は必要最低限の情報にとどめておく＊44。スュランの序文の冒頭では、信仰（foi）と経験（expérience）という二対が呈示

＊43　「消失〔perte〕」の経験がエクリチュールを生じさせるという図式は、『神秘のものがたり』の冒頭の頁においてすでに現れており（*FMI*, 9）、フロイトやマラルメが論じられる際にも顔を覗かせている。*EH*, 388, 410-411 ; *HP*, 141-142.

＊44　スュラン『経験の学知』からの引用は次の文献による。Jean-Joseph Surin, *Triomphe de l'amour divin sur les puissances de l'enfer et Science expérimentale des choses de l'autre vie (1653-1660)*, suivi de « Les aventures de Jean-Joseph Surin » par Michel de Certeau, Grenoble, Jérôme Millon, 1990. スュランの「序文」におけるダイナミズムをきわめて鋭利なしかたで取り出している渡辺優による以下の叙述を参照のこと。『ジャン=ジョゼフ・スュラン　一七世紀フランス神秘主義の光芒』、62-68頁。

され、それらは「来世の生」の知へといたる二つの道であると述べられる。スュランは「体験」を「限られた人々のもの」であるとし、使徒たちと同様に、自分が体験した特異な出来事を読者に説明する——「私たちは、来世のありさまについて、見て、聞いて、手で触れたものを、この本を読まんと欲する人々に告げる」——という形をとって文を紡いでいく。その際、スュランは「ヨハネの手紙一」と「ヨハネによる福音書」、そして「ペトロの手紙」から数節を第一段落と第三段落とで引いている＊45。序文前半の記述は、経験が信仰に対して優位にあるかのように読めるが、第三段落以降、そうした見方は覆される（「私たちが見聞きしたと語るすべてのことは、ただ信仰という基盤の上にあなたたちを据えるために言われる」）。セルトーの読解は、スュランによる他者の言説の引用を戦略的な行為として捉えるものである。とはいえ、それは、引用がテクストを権威づけたり自身の証言の正当性を保証したりするために使われている、ということを意味するのではない。スュランによる引用は、特異な経験からその証言へ——いわば大他者から複数の他者へ——と向かうダイナミックな移行（passage）が、使徒たちがイエスより直接召命を受けた初代教会時代においても、スュランの生きている現在においても同様である、という同型性を示すためにおこなわれているとセルトーはみなしている。「記憶」が言及されるのは、まさにこの文脈においてである。

＊45　e. g.「命のことばについて、私たちが目で見たもの、聞いたもの、私たちが手で触れたものをあなたたちに伝えます」（「ヨハネの手紙一」1.1）。

> [……] このひと続きにおいて同じ立場にあって連続する信奉者たちの間には、従属関係というものはもはや無い。かくして『経験の学知』の著者は、初代の使徒たちと同じ権威をもつことになる。彼は使徒たちの場所を自分のものとすることができる。彼「もまた」その場所にいる。ちょうど、彼の本を読む者たちが使徒たちの話を聞く者たちと同じ立場にいるように。このとき、時間によって序列がつくられることはない。経験の構造からすれば、時間は問題にならない。神学の言説あるいは歴史の言説においておこなわれることとは異なり、いかなる本質的な価値も過去へ結びつけられはしない。記憶とは、むしろそれぞれの現在において認められ明かされるべき、或るひとつの形式の永遠性であるのだろう。（*FMI*, 252.）

ここでは、にわかに信じがたい出来事を証言するという単独的な行為が共通項となって、〈使徒－彼の言葉を聞く者〉の関係と、〈スュラン－読者〉の関係とが重ねられている。さらに、「時間によって序列がつくられることはない」、言い換えれば、始原たるイエスにより近ければ近いほど権威をもつ、という構造そのものがここでは

廃絶される。それが可能であるのは、過去と現在とをフラットに眺めることのできる形而上学的な次元に身を置くときであり、異なる複数の歴史的「現在」の間に、共鳴し合うひとつの「形式〔forme〕」を見出すときであるだろう。たしかに文脈からしても、また単純未来形（« la mémoire sera [...] »）が使用されている点からしても、ここで「記憶」の概念が十分に練り上げられているわけではない。しかし、第III-2節で明確化された「記憶」の実践的な意義を踏まえるならば、「或る形式の永遠性〔permanence d'une forme〕」といわれる「記憶」の規定をより精緻に理解できる。セルトーは、乗合馬車の青年との対話をめぐるスュランの書簡を読解するなかで、〈神秘家－出来事〉、〈歴史家－史料〉との間にアナロジーを見出していた。そのアナロジーに基づいて、セルトーはまるでスュランが想起したかのように想起し、スュランが幻視したかのように幻視する。セルトー自身の一人称的な要素を排除しない、こうしたレクチュールの実践を、私たちは『日常的なものの発明』を補助線とすることで、「記憶」と呼んだのである。

大筋において、このことは、「或る形式の永遠性」としての「記憶」が取り出される当座の文脈においても妥当するように思われる。上の引用文によれば、「記憶」は「それぞれの現在において」、すなわち使徒の時代やスュランの時代において――またおそらくはセルトーが生きた時代において――別様に覚知され、同一のものとして「認められ明かされる」。言い換えれば、それはそのつど歴史的に見通されるほかない、歴史を超えたかのような構造であるとされている。ある時代と別の時代との間にアナロジカルな関係性を読み込む解釈行為のなかで、セルトーはこうした構造を看取する。それゆえ、解釈なしに「或る形式の永遠性」を見出すことはできないといわねばならない。無論、ここではセルトー自身とスュランとの間のアナロジーが明確に語られてはおらず*46、際立った一人称的要素を見出すことは難しいものの、「記憶とは［……］であるのだろう〔la mémoire sera [...]〕」と単純未来形によって述べる非断定的な箇所は、解釈者たるセルトーそのひとのポジションを示唆しているように思われる。だとすれば、『神秘のものがたり』第6章においても、「メタ言語という虚構を拒否する」（*EH*, 11）「主体の科学」は実践されているといえるのではないだろうか。

本稿は、「記憶」に関する理論的主張をセルトーの歴史叙述と照合することで、その実践の独自性と意義とを論じてきた。終わりに、本稿の射程を先行研究に対する位置づけから簡潔に示しておく。

『日常的なものの発明』と『神秘のものがたり』とを並べて読まなければならないとリュス・ジアールが注意を促していたように*47、セルトーの日常性分析ないし現代文化論と神秘主義論との間をいか

*46　フランソワ・ドッスは、その浩瀚な伝記において、『神秘のものがたり』の序論とスュラン『経験の学知』序文との間にはそのポジションにおいて「アナロジー」があると述べている。François Dosse, *Michel de Certeau. Le marcheur blessé*, Paris, La Découverte, « Poche », 2007, p. 564.

*47　Luce Giard, « Un manquant fait écrire », *Le voyage mystique. Michel de Certeau*, Paris, Cerf, 1988.

に架橋し論じるかは、いまだ解釈上の争点であり続けている。本稿が取り上げた「記憶」の主題は、一見すると異質にみえる二つの領域――日常なるものと神秘なるもの――の間のたんなる語彙上の共通性といった表面的なレベルではない、両者の実質的な結びつきを検討するための手掛かりとなる。哲学的あるいは言語論的観点からコーパスを取り扱い、セルトーにおける一貫した思考のモチーフを探究する研究が現れてきているなかで*48、本稿の議論は、歴史思想家としての彼の独自性を提示することに寄与するものといえる。本稿の議論と密接に関連するものと思われる、日常と神秘の結節点ともいうべき「群衆」や、「詩／散文」などの諸テーマを探究する試みは、今後の課題としたい。

*48　Dominique Salin, « Michel de Certeau et la question du langage », *Recherches de science religieuse*, 104/1, 2016, p. 33-51 ; 渡辺優「「パロール」とそのゆくえ　ミシェル・ド・セルトーの宗教言語論の輪郭」、『天理大学学報』70巻1号、2018年、1-28頁。